

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

去年の八月にイラク軍がクウェイトを占領してから約七ヶ月がたち、イラクが完敗して戦争が終りました。この期間に一〇万人をこえるイラクの民間人や軍人が激しい空爆や砲撃で死に、アメリカ側の兵士も数百人が死んだとのことです。都市は破壊され、大量の資源が失われ、自然環境も大きく損なわれました。イラクは九年前にもイランを侵略し、八年にわたる戦争が続いて、双方とも何十万人もの人達が命を落しました。今回は二回目のイラクによる侵略から事が始まりました。然し今回の戦争についていえば、アメリカが多くの慎重論を押し切り、経済制裁の結果を見届けることなく開戦に持込んだものでした。大きな戦禍は、軍事力の行使を容認した国連の信用を大きく傷つけるものでした。しかも、イスラエルが国連決議に反してパレスチナを軍事占領していても放置しておき、イラクに対してだけは破滅的な軍事攻撃を認めるといふのも

## 中東湾岸戦争の終結を見て

上野 正

公正を欠いた仕打ちであり、この点でも国連の信用は損なわれました。第二次大戦後、アメリカ政府は中東の石油資源国が強力になることを一貫して妨げて来たと思われまます。その点では、イラクの独裁者フセインの行動は、イランとの戦争といひ、今回のクウェイト占領といひ、まさにアメリカ政府の思う壺にはまったともいえる結果に終わりました。今回の湾岸戦争は世界中に大きな影響をもたらしました。東西の冷戦の事実上の終結によって影のうすくなっていた軍関係者や、産軍複合体は活気づきました。パトリオットミサイルはほとんど売れはじめたとか。ソ連でもペレストロイカが難航している所に今回の戦争が重なり軍部や保守派の勢力が更に拡大したといわれています。日本政府も、平和のための国際協力、国連への協力を名目に掲げて、実際には国際的な軍事活動への参加の手掛りを握ろうとして来ました。既に多国籍軍への巨額な軍費の提供によって軍事

介入に間接参加し、さらに自衛隊をどんな形ででも海外派遣する機会を得ようとする努力を重ねて居り、野党の一部も取込まれて来ました。日本では国際協力、国連への協力的な言葉が、人々をあざむいて国際的軍事活動に引きこむために使われていますが、イラクではアラブの大義、アメリカでは国際正義などのことが、若者達をだまして戦場に生命を失わせて来ました。今度の湾岸戦争で死んだイラクやアメリカの兵士達は十分な知識と、それに基く判断によって進んで戦って死んだのでしょうか？ 殆どの人達はそうではなかったのだと思います。実際には一部の有力な人達や企業などの利害や、判断によって決められた政策実施の末端を荷負わされて死んだのです。こうしたことはどうしても止めさせなければならぬと思います。それが平和への道だと思えます。とくに現時点で平和憲法を持つ日本の場合、実質的な民主化を進めて行くと共に、本場の国際協力によって、普通の人がだまされぬような、特にだまされて殺されないような世界を実現してゆかないのだと思います。(東京大学教授、数学者、「科学と平和国際週間・日本連絡委員会」コーディネーター)

## 湾岸戦争の中、二〇世紀後半の核開発・利用を考える

三・一ピキニ事件記念集会ひらく

被爆三七周年の「三・一」を前にした二月二十八日、東京の文京区民センターで「三・一ピキニ事件記念集会」が、協会主催で開かれました。集会は、服部学理事の司会で開かれ、小川岩雄理事が主催者を代表して挨拶しました。小川氏は、ピキニ事件の今日的意義にふれつつ、「第五福竜丸は人類の未来を啓示する」と保存運動、展示館の設立、発展のため力を尽くし、昨年秋亡くなった三宅泰雄前会長を偲びま



文京区民センターでひらかれた3.1ピキニ事件記念集会

した。記念講演は、恒例により今年も二人の講演。最初に、村野賢哉東海大学文明研究所教授が、「パールハーバー五〇年と福竜丸三十七年」と題し、およそ一時間講演しました。村野氏は、湾岸戦争と日本の貢献が論じられているいま、あらためて真珠湾攻撃と太平洋戦争を考察したいと述べ、アメリカの深層にいつもあるパールハーバーと広島・長崎をターゲットにする思想、

日本の運動がパールハーバーを忘れさせている状況は、もう五〇年の今年、克服されねばならないと強調しました。村野氏は、ピキニ事件の当時、NHKの記者として俊鶴丸に乗船、放射能の環境、国民生活に与える影響を明らかにしたジャーナリストですが、俊鶴丸の果たした役割、ピキニ事件の意義についても簡明に述べました。つづいて、岡野眞治放射線影響協会研究参加が、「チェルノブイリが残したものの」と題し、約一時間講演しました。岡野氏は、事故後の放射能影響調査に携わった経験にそって、汚染の状況と影響、

## 会長に川崎昭一郎氏を選出 評議員会、理事会開く

二月九日、学士会館で協会の第一〇一回理事会が開かれ、協会の新しい会長に川崎昭一郎(千葉大学学教授)氏を全員一致で選出しました。また、副会長には本多喜美氏を再選しました。理事会に先立ってひらかれた評議員会は、直前の第一〇〇回理事会の提案をもとに、理事・監事の改選(任期二年)を行い、理事としては、これまでの理事八名全員を再任したほか新たに松井康浩(

弁護士、協会監事)氏を理事に選出、監事には清水幹雄氏の再任と新たに河崎光成(弁護士)氏を選出しました。決定した役員は次のとおり。理事(九名) 川崎昭一郎(会長)。本多喜美(副会長)、小川岩雄、斎藤鶴子、猿橋勝子、田沼肇、沼田稲次郎、服部学、松井康浩(監事(二名) 河崎光成、清水幹雄)

現在の問題点等を地図やスライドを使って克明に述べ、被爆線量の限度の考え方、その限度への行政と住民の対応の違いと国民生活への影響について話を進めました。原子力の開発の出発点に核兵器開発があった点と、広島・長崎・ピキニの体験を持つわが国が他の開発国との異なる環境にある点をいつも心に留めておく必要性を強調しました。最後に川崎昭一郎会長が、協会の活動と展示館の前進について今後の決意を述べ、会を終了しました。集会には協会の理事・評議員・賛助会員はじめ、遠く山形県から太田林太郎さん、第五福竜丸乗組員の大石又七さん、杉並区の菅原健一さんや、日本赤十字看護学校の生徒さん、平和と軍縮をめざす全国連絡会の青年学生など、およそ五十名が参加しました。展示館の修理継続 一月十日以来進められてきた展示館の修理は、工事の進行と共に思わぬ傷みも見つかり、三月八日終了の予定を約二週間ほど延長し完全に修理することになりました。来館者の要望にこたえるため、館は工事を進めつつ、三月九日より開館、業務を再開しました。

# 十五年戦争期における焼津市の漁業(二)

## 監視艇隊(黒潮部隊)について(1)

高橋 鑛 逸



焼津の漁船の出陣風景(焼津市福一漁業所有)

前号の「たより」において焼津市の十五年戦争期の漁業(徴用船)についての概略を記した。この九〇隻にも上る徴用漁船は陸・海軍の戦争遂行目的という名の下の漁船員共々駆り出されたのであるが、当時軍の機密事項でもあり、民間の漁業組合などには記録はない。このレポートは旧海軍の少数ない戦時日誌から読み取ったものであ

るが、その行動記録は殆ど艦隊所属の「雑用船」として処理され、見当たらない。唯一記録として、これら漁船を中心に全船が徴用船で編成された部隊があった。これが大日本帝国海軍聯合艦隊第五艦隊第二十二戦隊(監視艇隊)通称「黒潮部隊」である。

この艦隊は、一九四一年七月二十五日、対ソ作戦の研究準備と、日米決戦の機運が増大してくるにつれ米機動部隊からの本土攻撃に対する警戒を目的につくられた。千島から台湾にいたる延長五〇〇〇キロに及ぶ太平洋の広大な海域は、島一つない極めて奇襲を受けやすい位置にあり、中でも防空上最も重要な東京は房総半島南端から一〇〇キロ弱の地点にあり、軍としては、当初の作戦計画の飛行機だけに頼っての哨戒では不安であるので、徴用漁船を編成して、関東東洋上上の哨戒を飛行機と監視艇によって行うことにしたのである。この艦隊の傘下に第二十二戦隊として、母艦・支援艦とも総

て徴用船で編成するという作戦が計画されたのである。飛行機は海軍航空部隊の木更津と南鳥島を基地としていた。

しかし、南方での戦局の推移(すでにこの時点で我が国は南部仏印に軍隊が侵略していた)や、基地の整備・漁船の艦装(戦争のための兵器などの据え付けなど)に準備が遅れて、二十二戦隊が発足したのは十月十五日であった。監視艇隊として、三監視艇隊七十二隻が、一九四二年二月二十五日編成されたが、一隻約一四名の乗組員は、海軍軍人と徴用された漁船員半々で任務につき、最大時には六隊一六〇隻、関係人員六〇〇〇人に及んだという。

当初編成されたこれら漁船は一〇〇トン未満の船が五十三隻(七四%)、一〇〇〜一五〇トン未満が一四隻(一九%)、一五〇トン以上が五隻(七%)と、殆どが一〇〇トン以下の木造船(鋼船は二割に過ぎなかった)であり、この展示館の第五福竜丸の三分の二ぐらいの漁船が大部分である。

この七十二隻の漁船は、一哨戒隊二十五隻、二哨戒隊二十五隻、三哨戒隊二十七隻で構成され、三交替で本土はるか七〇〇哩(約一三〇〇キロ)の太平洋洋上北緯三

一度三〇分以北、東経一五二度以東を中心として、縦一線に一船間隔二〇哩に並び、二四時間哨戒にあたった。哨戒海域まで基地(大湊または横須賀)から往復八昼夜、哨戒九日での交替哨戒隊が来て引き継ぎをおえて基地に帰り、船の修理・整備、つぎの哨戒出発の船積みなどの作業に従事していた。

当初監視艇の装備は、七・七ミリ機銃一、小銃若干であったが、幾度かの監視経験を踏まえてのち、爆雷四個を搭載することになったと、戦時日誌に記録されている。哨戒監視に出動した二月末の太平洋の北東洋上は、連日特有の猛烈な荒天が続く海域であり、耐波にも耐寒にも極めておそまつな設備の中での哨戒であったという。台風が来ても、船は避難することも許されず、乗組員に病人が出ても無線で救助を求める打電も許されなかった。無線を打てば監視艇隊の位置が敵側に知られるからである。ただ敵機動部隊を発見した場合だけ無線による打電が許されるのみであった。太平洋の真ただ中、同僚船との交信もできず孤独な監視をつづける漁船員は、苦痛の連続であったと思われる。(静岡県近代史研究会会員)

# ビキニ被災漁船員の追跡調査

高橋 良 雄

ビキニ被災三七周年の三・一ビキニデー集会は、湾岸戦争のぼつ発と地上戦への突入、核・化学兵器使用の危険が切迫し、「原水爆の被害者は私を最後に」という久保山愛吉さんの「遺言」が守りつづけられるかどうかという重大な岐路のなかで開催された。集会前日の二月二十八日、湾岸戦争の事実上の停戦によって、「遺言」はかろうじて守られた。

しかし、この危険をくり返させないためには、一発残さず核兵器・化学兵器をなくし、その使用の根源である軍事同盟をなくさなければという思いを一層強く感じさせた集会であった。

また、この集会は、一九八五年以来、高知県のなかまによって開始され、沖繩にも広げられた。ビキニ被災漁船員の追跡調査が全国化への新しい段階に入ったことを強く感じさせた集会となった。集会のなかで、高知県ビキニ水爆

実験被災調査団代表は「当時隠された延べ八五六隻の被災船の資料公開を関係機関に求めつづけてきたが、どうしても見つからなかった。しかし、最近、あるところから入手した資料によって全国的な被災漁船の実数は五四八隻をこえ、高知一一七隻、神奈川八四隻、鹿児島六三隻、静岡三六隻などとなっている。太平洋沿岸全都府県にわたっている。この一覽表を裏づけるために、全都府県での調査をよびかける」という発言を行なった。

焼津を持つ地元静岡県の平和・原水爆禁止運動の関係者にとって、この「追跡調査」は高知の調査開始以来、何とかしなければ、という強い思いであったが、そのまま日時を経過させてしまっていた。

一九九〇年の三・一集会への久保山すずさんから寄せられた「第五福竜丸の二三人のおなかまのう

ち、夫のほか七人の方がまだお若いのに亡くなってしまいました。

「死の灰」を浴びたばかりの何百隻もの船の方々は大丈夫でしょうか。被爆者の皆様が、「今年こそはぜひとも国家補償の援護法を」と訴えておられるお気持ちがよく解ります」という「おことづけ」は、私たちに一層、調査を急げ、という思いをかきたてるものであった。

私たちは、その第一歩として九月二三日の焼津における故久保山愛吉氏追悼行動の墓前で「ビキニ環礁水爆実験・死の灰・被災者の実態を追跡調査・究明し、救済・補償措置について考える会を設立しましょう」との「よびかけ」を發した。

「考える会」の設立は、第一に核軍拡競争の犠牲者・ビキニ水爆「死の灰」被災者を放置したままはどうして、真の核軍縮を推進することができなのか、第二に、ビキニ「死の灰」は、公海で平和のうちに正常な生業をいとなむ日本の漁民の上に浴びせられたのであり、いかなる国にもゆるされない人道と国際法に違反する人権の侵害であること、第三に、従って、県下のビキニ被災者の実態を追跡

調査・究明し、被災者への救済・補償措置の必要性・在り方を考えるという主旨からはじめられた。

今年二月、このよびかけを一步具体化するために、①調査の対象者を見出す方策とその作業努力の系統化、②調査項目の選定と調査用紙の作成、③調査チームの組織と調査方法、④必要な専門家の協力(医学・核物理学・法律他)、⑤会の組織などについて懇談する会がもたれるに至った。しかし対象者をつかむ問題、因果関係の問題など、こえなければならぬ問題が私たちの前に立ちはだかっている。地元に住む第五福竜丸の元乗組員や、それ以外の当時の漁船員の話が伝聞として伝えられるわずかな手がかりを突破口としていくしかない。

このようなかで、今年の三・一集会における高知県代表の発言は、私達を大きく激励するものとなった。何とかやれるかも知れない。よしやろうという決意を私たちにためさせてくれた。今年の九・二三までに調査の成果が報告できればと思う今日である。(静岡県平和委員会事務局長)